

「京都東山七条下る。近所の智積院の境内にはキリギリスやセミ、ヒキガエルやイモリがいくらでもいた」(季刊「生命誌」25号サイエンティストライブラリー：増井禎夫博士)。

数十年前の思い出でしょうか。そのニホンヒキガエルが今や京都府カテゴリーの準絶滅危惧種に指定されてしまいました。

大きな原因は生息地の変化だと思われます。何でもない池、沼、緩い流れ、そんなありふれた止水域で人口に膾炙する程の蛙合戦を繰り返しながら、そこら辺の土に潜って堂々と暮らしてきたヒキガエルたちでした。それが、水辺にカエろうとして車に轢かれ、コンクリートの溝に落ち込み、塀に阻まれ、果ては故郷の池が見つからず、減ってしまったようなのです。

水田の持つ生物多様性保全機能が、洪水防止や水質浄化などと共に見直されてきました。しかし、水生生物にとってその減少や圃場整備は、依然大きな打撃となっています。ヒキガエルのためには田んぼだけでなく、身近な水辺にも視線が注がれるべきでしょう。

ナガレヒキガエルの発見者でもあられ、前号の表紙についてご指導くださった松井正文氏から、「京都は、東北日本のアズマヒキガエルと、西南日本のニホンヒキガエルとの境界を含む。私がそれに気付いたのは、桃山丘陵(現在ほぼ壊滅)と、岩倉(やはり産卵場所がほぼ壊滅)や北山との大きな違いであったが、その後、修学院あたりから南はニホンヒキガエルであることが分かっている。主に鼓膜の大きさの違いで区別されるにすぎないと思っていたが、遺伝的変異の調査からこれらは別種程度に区別されるべきことが分かっている。詳しい分布関係などを知ることは、日本の生物地理を考えていく上で重要である。一方、ヒキガエル類の産卵場所、個体数の減少は著しく、ともかくその生存を保つことが重要である」とのメッセージをいただきました。

暮らしの視点では、ガマの油売りの口上を思い出すのもよいかもしれません。「ここに取り出したる陣中膏、これ四六のがま、前足の指が四本で…」ヒキガエルの分泌液は蟾酥という生薬になり強心、鎮痛、止血作用があるとされます(有効成分は塩酸エビレナリン、プファリン、デスアセチル等)。

「ヒキガエルは月にすむ」という古代中国の言い伝えは、正倉院宝物にも残されています。「月に兔」は「<sup>うさぎ</sup>顧菟」の「菟」の字の間違いかからきたという説もあります。

進化史上初めて上陸した脊椎動物(イクチオステガ・約3億7千万年前)に繋がる両生類は、淡水域を含めて陸上環境の変化に敏感です。なかでもカエルたちは身近な隣人として、地域生態系の重要な指標です。

今年も、お寺の池周りではモリアオガエルが、あちらこちらではタゴガエルがよく鳴いていました。かつて、大文字山登山道脇の水路で、大雨に流されてきたニホンヒキガエルのオタマジャクシが観察されたこともあったそうです(「流水中でのヒキガエル幼生の観察」松井正文1974)。山の水溜りや麓の水辺で、ヒキガエルたちが貴重な生息域を保ち続けてくれていますように。



ニホンヒキガエル 2014.10  
(森のセンターの前にて)



ニホンアマガエル 2012.9  
(大藪集落跡にて)  
水田に依存性の高いトノサマガエル、ヌマガエル、ニホンアマガエルなどは、京都府カテゴリーの要注目種



正倉院の桑木阮威  
(くわのきげんかん)  
腹板の上部に貼られた二つの円形の草の一方に太陽を表す三本足の鳥が、もう一方に月を表す、ヒキガエルとウサギが、桂の木と共に描かれている

ヒキガエル(左)とウサギ(右)  
近赤外線撮影  
朝日選書『正倉院学ノート』より